

## 小・中学校の円滑な接続に向けた英語教育

萩野 真紀\*・須曾野仁志\*\*

Smooth-connected English Education for elementary and middle school students

Maki HAGINO and Hitoshi SUSONO

### 要 旨

英語を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の総合的なコミュニケーション能力を育むためには、9年間を見通したカリキュラム編成や小学校英語活動から中学校英語教育への円滑な橋渡しは重要である。

本研究は、平成 17 年度 (2005 年) に中学校教員により一足早く行った小学校での英語授業の実践を報告するとともに、これからの小・中学校の円滑な接続に向けた英語教育を推進するための方策を探ることを目的として取り組んだものである。

保育園、幼稚園、小学校、中学校の教員や地元住民等で編成された C 中学校区教育推進協議会の事業の一環として行った授業では、2 学期にアルファベットを読むこと、ヘボン式ローマ字を読むこと、書くことの授業プログラムを、3 学期に二限目としてフォニックスを紹介し音と文字を結びつけて簡単な英単語を読むことの授業プログラムを 6 年生に実践し、中学校における英語教育入門期への足がかりとして一定の成果が得られた。

外国語指導助手 (ALT) による「聞くこと」「話すこと」の活動中心であった小学校外国語活動に「読むこと」「書くこと」を加えて、併せて中学校英語教育との段差をどのようになくしていくのかについての可能性が示唆された。

キーワード：外国語活動、中学校英語教育、フォニックス、小学校英語教育、教科化、ヘボン式ローマ字

### はじめに

文部科学省 (2003) は、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を策定した。「英語が使える日本人」育成のために、日本人に求められる英語力の目標を次のように示した。

国民全体に求められる英語力は、「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」こととし、具体的には中学校卒業段階で挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる (卒業者の平均が実用英語技能検定 (英検) 3 級程度)、高等学校卒業段階で日常的な話題について通常のコミュニケーションができる (卒業者の平均が英検準 2 級～2 級程度) と数値目標を掲げた。また、専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力は、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」こととし、具体的には各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定するとした。

今後のグローバル化の進展の中で、「英語が使える日本人」を育成するためには、『コミュニケーションの手段』としての英語』という観点から、初期の学習段階においては音声によるコミュニケーション能力を重視しながらも、「聞く」「話す」「読む」「書く」の総合的なコミュニケーション能力を身に付けることが重要である。こうした指導を通じて、国民全体のレベルで、英語により日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付けるようにすると同時に、職業や研究などの仕事上英語を必要とする者には、上記の基礎的な英語力を踏まえつつ、それぞれの分野に応じて必要な英語力を身に付けるようにし、日本人全体として、英検、TOEFL (トーフル)、TOEIC (トイーック) 等客観的指標に基づいて世界平均水準の英語力を目指すことが重要である。

\* 三重大学東紀州サテライト東紀州教育学舎

\*\* 三重大学教育学部研究科教職実践高度化 (教職大学院)

学校教育においてこのような能力の育成を図るためには、各学校段階を通した一貫性のある指導を行う必要がある。このため、新学習指導要領を踏まえ、各学校段階で求められる英語力の達成目標を設定し、英語の授業の改善、英語教員の指導力向上及び指導體制の充実、英語学習のモチベーションの向上などに取り組み、接続する学校間が連携しながら、それぞれの段階で求められる英語力を着実に身に付ける指導を推進する。

以上の目標から、英語教育改善のためのアクションとして①英語の授業の改善、②英語教員の指導力向上及び指導體制の充実、③英語学習へのモチベーションの向上、④入学者選抜等における評価の改善、⑤小学校の英語活動の支援、⑥国語力の向上、⑦実践的研究の推進を行動計画として打ち出した。

本研究は、この行動計画が策定されて2年目の授業実践である。

## 研究の概要

### 1 授業の概要

C 中学校区である K 町では、平成 12 年（2000 年）より町内 4 小学校に英語教員（ALT）を派遣し、「聞く」「話す」の活動を通して小学校から英語学習の基礎を培う授業を行ってきた。取り組みの成果ともあまって平成 16 年（2004 年）実施した学力調査結果では、C 中学校の英語は全国平均よりもかなり高い結果となった。

この先進的な英語をさらに進めるために中学校の英語教員と小学校の教員の TT（ティーム・ティーチング）による英語授業を行い、小学校での英語活動の成果が中学校での英語学習へとスムーズにつながっていくことを目指すものであった。

中学校教員による英語学習は、町内の保育園、幼稚園から中学校までの教員と PTA、自治会長らでつくる C 中学校区教育推進協議会が計画し、町内の四つの小学校のすべての 6 年生を対象に行われた。

2 学期と 3 学期に各校で 1 時間ずつ実施したこの取り組みは平成 17 年が初めての試みであった。なお、この出前授業は、翌年から徐々に内容や回数変動するも、周辺地域の校区にも広がり今も継続されている。

平成 17 年度の 2 学期にアルファベットを読むこと、ヘボン式ローマ字を読むこと、書くことの授業プログラムを実施した。（図 1）



図 1 アルファベットを空書きで覚える（A 小）

3 学期に 2 限目としてフォニックスを紹介し音と文字を結びつけて簡単な英単語を読むことの授業プログラムを実施した。（図 2）



図 2 英語の名前読みと音読み、英単語を練習する（B 小）

指導は、中学校の教員 3 人が中学校のテスト期間内や懇談会などの空き時間を利用して出前授業として交代で A、B、C、D の各小学校に出向き、それぞれの教員が同一の指導案で足並みをそろえて行った。基本的に、中学校の教員が小学校の学級担任と 2 人で小学校の教室で TT（ティーム・ティーチング）というスタイルで行ったが、2 クラスを合同にして会議室で 52 人を対象にして中学校の教員が小学校の学級担任 2 人と日本人の ALT を加え計 4 人による TT で行う場合もあった。

本研究は、この 2 クラス合同の D 小学校で行った授業を取り上げ検討するものとする。

### 2 授業実践

授業展開は次頁の通りである。

目標「英語の文字とヘボン式ローマ字に親しむ」(45分)

分	児童の活動内容	中学校教員の活動	小担任/ALT	留意点
5	挨拶をする。 (Hello.)Hello. (How are you?) Fine, thank you. And you?  英語による自己紹介を聞き、交流する。	挨拶をする。 英語授業での約束を紹介する。 ・ Eye contact! ・ Big voice! ・ Listen carefully! ・ Smile!  英語で自己紹介をする。	挨拶をする。  ・アイコンタクト ・大きな声 ・よく聴く ・スマイル  日本語で分かったことを問う。	導入段階で絵カードを提示して、スムーズに英語に親しめるように明るく楽しい雰囲気を作る。
<p>Hello, everyone. My name is . . . . I'm from C . . . . junior high school. How are you? I'm super because I can study English with you at . . . . elementary school. I'll show you 4 important rules for enjoying English lessons. Eye contact! Big voice! Listen carefully! and Smile! O.K.?</p> <p>I'll introduce myself. I like music. I like to play the piano and the flute. I also like all sports. For example, kendo, volleyball, basketball, tennis, table tennis, golf, soccer, softball and skiing. I usually watch baseball games on TV. My favorite professional baseball team is Dragons. That's all. Thank you. Now let's enjoy studying English together</p>				
3	アルファベットの歌を歌いアルファベット順を知る。	大文字と小文字の表を掲示する。 Let's sing a song ABC!	自信をもって歌ったり発音できるように促す。	言えない子どもを支援する。
3	大文字を発音しながら書き順を覚えながら空書きする。	文字の導入をすることを伝える。 大文字を言いながら板書する。×2	正しく大きな声で発音できるように声をかける。	4線のどこに各文字が位置するのか確認する。
3	小文字を言いながら空書きをする。	小文字を言いながら板書する。×2	正しく大きな声で発音できるように声をかける。	一階建て、二階建て、地下室の3つのサイズや、縦や左から書くことに気づかせる。
3	小文字のそれぞれの形を知る。	それぞれの形を説明し確認する。		
3	カードの文字を発音する。	フラッシュカードで読みを確認する。	一緒に発音する。	言えているか、一人ひとりに気を配る。
5	ペアで小文字カードをアルファベット順に並べる。	小文字のアルファベットカードを配り順に並べさせる。 Say "I'm done." and raise your hands.	机間巡視する。	リズムカルに進める。
5	ヘボン式ローマ字について知る。	ローマ字表を提示し、訓令式と比較しながらヘボン式ローマ字を紹介する。 「ん」「っ」の表し方、固有名詞の最初は大文字であることを知らせる。	机間巡視する。	訓令式とヘボン式で異なる文字に注意させる。
5	ヘボン式ローマ字を読む。	身近なものを表したローマ字カードを読ませる。pen, isu, hon, tokei, Jogi, tsukue, fudebako, keshigomu sushi, tempura, judo . . .	読み問題を提示する。	教え合う雰囲気大切にする。
5	ペアで文字カードを並べて身近な日本語の単語をローマ字で表す。	既出の日本語の単語を文字カードを使って並べさせる。	机間巡視する。	訓令式との違いに気づかせる。
3	ペアでカードを読みながらアルファベット順に重ねる。	カードを順番通りに重ねて返却させる。	適宜支援する。	輪ゴムで縛らせる。
2	まとめと宿題の確認をする。  挨拶をする。See you next time.	授業の評価をし、自分の名前をヘボン式で書けることを宿題とする。 挨拶をする。See you next time.	挨拶をする。See you next time.	今日の学習の評価し、今後の意欲につなげる。

- ・対象 C 中学校区 D 小学校 6 年生 52 名
- ・日時 平成 17 年 12 月 16 日
- ・場所 D 小学校会議室
- ・指導計画 (全 2 時間)
  - ①英語の文字とヘボン式ローマ字に親しむ (本時)
  - ②フォニックスを知り英単語を発音する

3 考察

授業は、適宜日本人 ALT、学級担任が日本語で支援したが、挨拶や指示、自己紹介を可能な限りシンプルな英語で行うと、子どもたちが英語を理解しようとする姿が見られた。

アルファベットの発音を歌で体感し、大文字、小文字の順に、書き順を「1、2、3 . . . .」と言わせながら板書と同時に指で空中に大きくなぞらせたが、教員が子どもたちの方を向き子どもたちの方から見て正しくなるように大きく鏡字を書く空書きも効果的であると気づいた。

大文字は、基本線から上の 2 階建てであるのに対して小文字には一階建て、二階建て、地下室に潜るものなど様々な形があることを伝え、それらの特徴をつかませた。中学校英語の入門期にアルファベットを扱う時点でも小文字の形でよくつまずく生徒がいるので、しっかりと文字の高さを意識して書かせて定着するまで小文字指導をすることは大切だと考える。(図 3)



図 3 小文字の形の特徴を知る (D 小)

また、書き順にも左から書く、縦から書くというルールがあり、筆記体にもつながることを紹介すると、「ブロック体や筆記体など、いろいろな書き方があって勉強になった (C.K.)。」「『読賣新聞』2005.12.21 朝刊) などという感想があり、目の輝きが変わった。

アルファベットの歌の 1 フレーズの 7 文字をセットにして、カードを並べるゲームや集めるときに歌を思い出しながら 7 文字ずつアルファベット順にまとめて関連付きやすいように、板書を工夫した。

小学校3年生の2学期に学習する訓令式ローマ字は規則的で覚えやすいのだが、英語の発音や綴りと結びつきにくい。音声と綴りが結びつきやすいヘボン式ローマ字を知っておくだけでも英語学習に有効であると考え、訓令式ローマ字表の上に用紙の色を変えて訓令式と異なるヘボン式文字を貼っていく形で工夫して説明したが、先に行ったフラッシュカードによる読みの確認もそうであるが、ICTが整備された現在では、ICT機器を使って容易に視覚や聴覚に訴え説明や練習をすることが可能であろう。(図4)



図4 文字カードでヘボン式ローマ字を作る (C小)

固有名詞の最初は大文字で表すことや拗音、撥音、促音、拗音に触れた後に、ヘボン式表記による身近な持ち物や日本の食べ物、地名などを表したヘボン式ローマ字の読みを学級担任がカードによりクイズ形式で出題した。続いて行った、クイズで出題されて既出のヘボン式ローマ字を文字カードを並べて再現するゲームは、楽しく書くことにつながる活動であった。

授業の最後に宿題として、自分の名前をヘボン式で書けるようにすることを学級担任と日本人ALTにその後のサポートを依頼し、宿題として課した。パスポートの名前もヘボン式ローマ字で表記するということもあり、2回目の出前授業でネームカードを書けるように、また中学校入学時に英語学習に抵抗がないようにと、先を見通すことは重要であると考え課題を出した。

全体を通して、「英語を習っているけど、面白くて分かりやすかった(M.O.)。」「(『伊勢新聞』2005.12.17)」「とても楽しかった。中学校で英語を勉強するのが、今から楽しみ(K.M.)。」「(『読賣新聞』2005.12.21 朝刊)」などという意見があり、中学校英語学習への期待が感じられた。

英語の文字の導入を小学校の吸収の早い時期に行うことで英語への興味・関心を高め、中学校での文字の読み書きのつまずきの減少や英語学習へのモチベーション向上につながると考察された。

## おわりに

知的好奇心や思考力が高まる段階の6年生にとって、英語の文字と音の単純な結びつきは興味を持って十分理解ができるものであると考えられる。また継続と繰り返すにより身につく可能性が高いものである。インプットする(聞く・読む)にもアウトプット(話す・書く)するにも音声だけでは不安を感じる子どもたちもいる。

ヘボン式ローマ字やフォニックスを導入することにより基本的な単語の意味及び音声と文字を直接つなげるための手がかりとなり、中学校の英語学習への動機付けになることが明らかになった。

小学校において、平成23年度(2011年)より新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化され、さらに2020年度から小学校で全面実施される次期学習指導要領では英語教育が前面に打ち出され、年間70時間の「外国語」科目となり、教科化が実現される。

小学校での「聞くこと」「話すこと」中心の英語活動から「読むこと」「書くこと」が加わった中学校英語教育との間の段差をどのように解消するのかが大きな課題となり取り組まれた本研究の授業では、小学校と中学校の連携を強化し中学校における英語学習入門期の授業改善や、中学校生活への期待や希望を抱かせるねらいをもって実践研究的に実施された。平成17年の時点で6年生に「読むこと」「書くこと」を意識して中学校教員と小学校学級担任がチーム・ティーチングで取り組んだ実践は画期的であったと言える。

今後、中学年の外国語活動の導入、高学年の英語教科化と授業時間の増加に伴い、小中高大まで一貫した学びを見据えたカリキュラム編成や教材開発、指導体制の整備、評価の仕方の検討などが必要になる。

小学校段階で文字と絵や意味を併記して読み書きを同時進行し体感させながら英語の音声と綴りを結びつけ、中学校での文字学習に抵抗なくつながる効果的で効率的なプログラムや、国語教育をはじめ他教科と関連させた教科横断的な授業づくりについてひきつづき研究していく予定である。

## 引用・参考文献

- 文部科学省(2002). 小学校外国語活動 研修ガイドブック.
- 文部科学省(2003). 「英語が使える日本人」の育成するための行動計画.
- 文部科学省教育課程部会外国語専門部会(第11回)議事録配布資料.
- ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/06022214/006.htm#e](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/06022214/006.htm#e),2017.10.29)